

淨土古剎玄中寺

東本願寺

宋沙蔭著

滋野井恬  
桂華淳祥  
訳

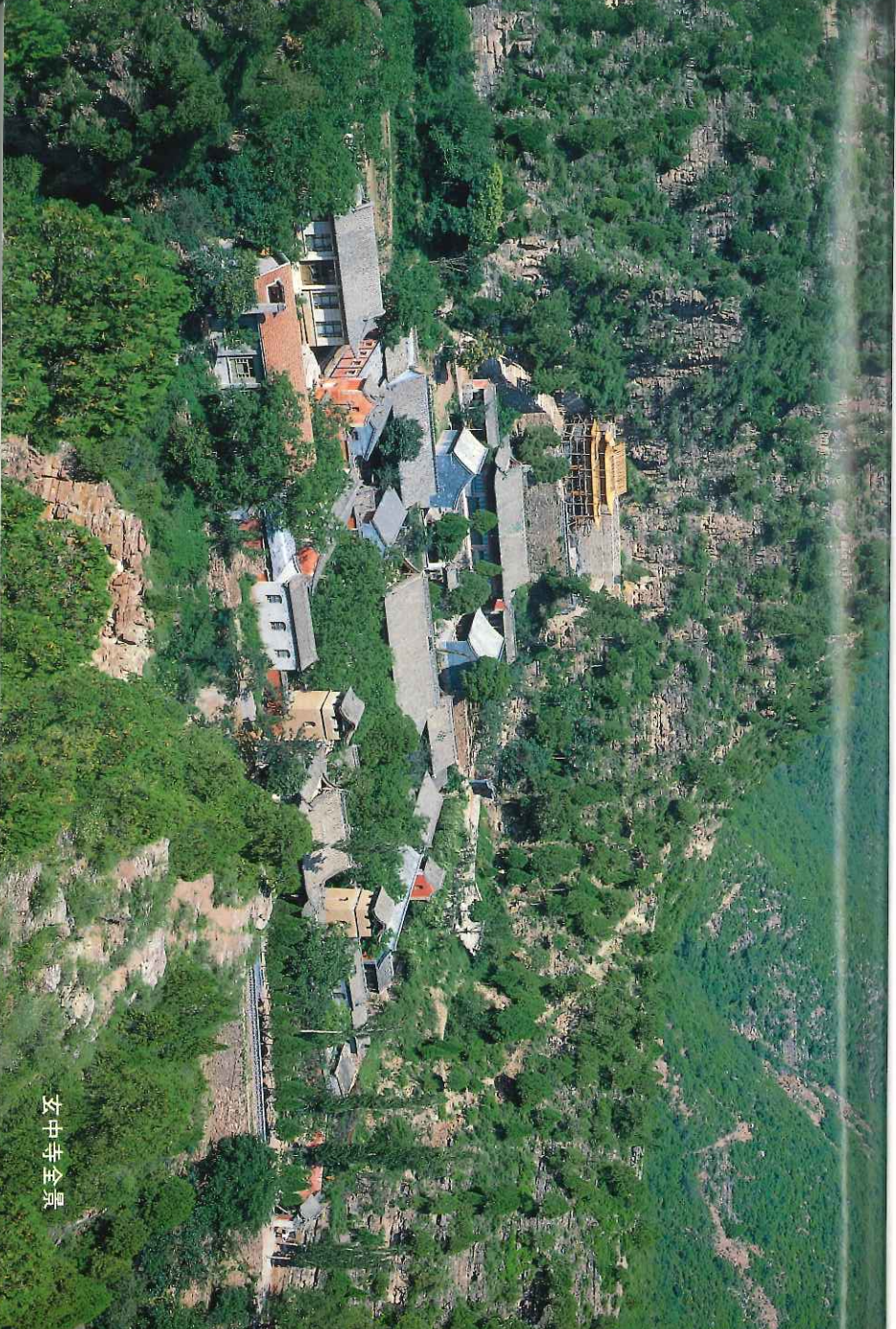
中日友好

世代常新

玄中寺

以達

甲午年  
四月



玄中寺全景

浄土古刹玄中寺  
目次

序	1
第一章 仏教の伝来と中国の浄土教	7
第二章 浄土教の伝承と三大祖師	27
第三章 玄中寺の創建と浄土教史上の地位	73
第四章 中日両国浄土教の発祥地・玄中寺	95
第五章 日本の浄土教徒と玄中寺	117
第六章 玄中寺の歴史	163
第七章 古碑	193
第八章 塔院・墓碑・住僧達	227
第九章 玄中寺讃歌	245
第十章 玄中寺の復興と浄土教の繁栄	289
第十一章 玄中寺の現況	319
あとがき	

序  
言

大雄宝殿(本堂)



山西省交城県に位置する石壁玄中寺は中国仏教史上、とりわけ中国浄土教史の上で、重要な地位をしめ影響を与えてきた。北魏の高僧曇鸞大師の創建になるこの深山の古刹は、また浄土教の高僧道綽禪師が生涯念仏法門を弘伝した道場であり、さらに阿彌陀仏の化身と称される善導大師が浄土の教えに帰信した聖地でもある。

中国仏教協会の林元白氏は「中国浄土教史上玄中寺的地位」(『現代仏学』一九五六年九月号)の中で、中国浄土教の発生・発展および影響について、多くの考証をされており、玄中寺は「中国浄土教史上、その地位は明確なものである」「まことに念仏の根本道場であるということができる」と指摘されている。この言に疑いの余地はない。

また、玄中寺の歴史的な地位とその影響力は、ただに北魏から唐代にいたる国内の浄土法門の活動・伝播に貢献するところが大きかったということにおいて評価されるだけではない。その影響がはやくから中国を出でて遠く朝鮮・日本にも及んでいるということも重要なのである。日本においては、法然が玄中寺の三大法師の教えによって、浄土宗を開き、続いて親鸞もこれらの教えをさらに発展させ、浄土真宗を開いた。

以来七百余年、日本の多くの浄土教徒は終始玄中寺を彼らの祖庭とみなしてきたのである。特に一九二〇年、日本の高僧常磐大定師が玄中寺に参拝されてより、日本の浄土教徒にとって玄中寺の祖庭としての意義はさらに明確さを加え、中日両国人民の友好往来にとって、しだいにはっきりとした役割を見せ始めてきたのである。

新中国成立以来、人民政府は信仰の自由という宗教政策を実行し、仏教は保護され、玄中寺もまた復興された。政府の援助によって、仏殿・仏像の大規模な修復や再建事業が行われ、内外に著名な古刹玄中寺の面目は一新された。さらに重要なことは、中国におけるもっとも早い時期の念仏寺が、律寺・禪寺・講寺と移りかわった数百年の歴史の後、ついに念仏寺へかえってきたことであり、ここに浄土教の祖庭は新生することができたのである。

言  
序  
筆者は仏弟子でもなければ、また専門に仏教文化を研究する者でもない。我々は本来の仕事をする中で、幾度となく玄中寺の歴史や関係ある人々に接する機会を得たが、特に山西省仏教協会の根通法師と玄中寺の明達法師に出会ったことで、玄中寺について人々が興味をいだく多くの史実を知り、また日本の浄土教系宗派の人々の間

に、さらに深く玄中寺のことを知ろうとする気持ちが強くあることを知った。このようにことが玄中寺関係の資料を収集整理し、一書にまとめて玄中寺を理解するための手引きとして人々に提供しようという願いを生じさせたのである。これに対して幸いにも根通・明達両法師の熱心な勧めと心のこもった援助を得ることができたので、我々は自らの能力を顧みることもなく、あえて「門外仏談（門外漢の仏教談義）」を試みようと思ったのである。

門外漢であるから、誤りや苦笑をかうところが出てこよう。その点については「門裡（仏門の人）」に指導の任にあたっていただくことが最良と考えた。そこで根通・明達両法師にその手助けをお願いしたところ、快く承諾していただけた。まことにこの功德ははかりしれないものである。我々は「門裡」の援助をおおぎながら、「門外仏談」の仕事をはじめることにしたのである。

『浄土古刹玄中寺』の初稿が完成した後、また中国仏教協会会長趙朴初先生の厚いご配慮をいただくこととなった。先生には本書のために書名を書いていただいたばかりか、原稿を閲読していただき、多くの貴重なご意見やご提案を頂戴した。それによつて我々門外漢の仏教に対する誤った見方を正すことができたのである。また、多くの貴重な資料を提供していただいた。

中国仏教協会研究部の王新居士は趙朴初会長から委託されて原稿を調べてくださった人である。彼は一字一句に及ぶまで校閲し、仏教の専門家でなければできない助言を数多くしてくださった。趙朴初会長は、出版社への手紙の中で、「『浄土古刹玄中寺』の原稿を受け取ってから、私はこれを仏教協会研究部の王新居士に送り詳細にみてもらいました。彼は気がついたことはそれをメモに取り、執筆者の参考に供したのであります」と述べておられる。

このほか、雑誌『法音』の責任者である浄慧法師・寛忍法師には、忙しい中、全文を閲読願ひ、多くの貴重な意見を出していただいた。したがって本書は実際のところ仏教界の学者・専門家の人々のご配慮と直接のご指導のもとに完成したのである。

玄中寺について著した本書は、前にも述べたように、実のところわずかばかりの資料収集によつて編纂したものであり、中国浄土法門と玄中寺の沿革を研究し理解しようとする人々に、ひとつの材料を提供するのが目的である。もしこのようなわずかな



第一章 仏教の伝来と中国の浄土教

ものでも役に立ち得れば幸甚である。

山門(永寧禪寺の文字が見える)



玄中寺が中国浄土教の「根本道場」であり、中日両国浄土教の祖庭であるということから、まず玄中寺の過去と現在の状況を理解することが必要であるが、そのために欠かせないのは中国浄土教の興隆と伝承を知ることである。

仏教はいつ中国に伝来したのであろうか。『魏書』の記載によれば、それは前漢の哀帝の元寿元年（B・C・二）のことである。その時、中国に伝来した仏の教えは、ただ口伝による『浮図經』だけであり、それ以後になってやっと翻訳仏典が出てきたのである。これは北伝仏教と称されるもので大乘仏教を中心としており、主な經典は漢訳仏典の系統に属している。この他中国にはチベット族地区のチベット語系の仏教と、タイ族地区のパーリ語系の仏教とがある。

仏教は、前漢の哀帝の元寿元年に中国に伝来して以後、後漢、三国、魏晋の三百有余年を経て、南北朝時代に至り、ここに発展をみたのである。宋の文帝・梁の武帝に代表される南朝帝室は、仏教を篤く信奉し護持したので、仏教教義は広い範囲にわたって伝布し、数多くの仏教寺院が創建されるなど、仏教の発展は目覚ましいものであった。北朝をみると、北魏の太武帝と北周の武帝の二帝による廃仏事件はあったも

の、総じていえば各王朝は訳経に対して援助を続けるとともに、寺院の修復や石窟の開削を行ってきた。またこの時期には一部の僧が政界に登場し、直接政治に参与したこともあった。後趙の仏図澄、南朝宋の慧琳などはその例である。

一方、仏典の翻訳は、漢末に西域から仏教学者が相次いで中国に来てより、急速な発展を遂げ、後秦の鳩摩羅什を経て新しい段階へと進んだのである。そして南朝陳の真諦に至って、大小乗仏典のそれぞれの翻訳と紹介はいちおう基本的に完了をみた。

このような仏典の大量の翻訳と仏教の急速な発展によって、この時期に多くの名僧が世に現れた。なかでも道安や慧遠等の碩徳は中国仏教の発展に多大な貢献をしたのである。また僧肇の『般若無知論』、道生の『仏性論』はその影響たるや深遠なものであった。それとともに『涅槃經』『成実論』『十地論』『撰大乘論』『楞伽經』などの經論に対するそれぞれの師の説の宣揚もまた盛んに行われた。

北魏の後期より、皇帝をはじめとして后妃・公卿に至るまで多くの人々が仏教を尊崇したことによって、仏教はさらに盛んになり、仏教寺院の建立は各地に広まっていった。北魏においては、平城（現在の山西省大同市）から洛陽に遷都して二十有余

年の間に、全国の寺院の数は一万三千七百余にのぼり、その末期には三万余にまで増加した。また僧尼の数も二百余万人に達しており、仏教界の繁栄は絶大なものとなったのである。北魏の孝明帝の時には、胡太后が政権をほしいままにしており、その権勢によって洛陽に永寧寺を建立した。この永寧寺は僧房が一千間もあるだけでなく、それらは珠玉錦繡をもって飾り立てられた荘麗を極めるものであった。この寺院内には九層の仏塔があり、高さ九十丈、相輪もまた十丈で、塔の上の鈴鐸の音は夜間には遠く十里のかなたにまでもひびきわたった。当時、洛陽だけでも寺院数は三百以上にも達したのである。『魏書』卷一一四・釈老志によれば「寺院が民衆の居住する場所の三分の一を占領しようとしている」という。北朝はこのような状況であったが、一方の南朝もまた同様であった。梁の武帝の時には仏教を奉じて「国教」とし、仏教を興隆させたのである。この時、建康（現在の南京市）だけでも寺院の数は五百以上にのぼり、僧尼の数は十万人を越えていたのである。

ところで仏教が中国に伝来して以後、その伝播と発展の過程でまた多くの苦難と闘争の歴史を経てきた。特に中国に古くからあった儒教・道教の二教に対する闘争は、もっとも激しいものであった。漢の武帝はかつて儒教の説だけを採用して、他の諸説を排斥する政策をとったが、支配階級は多数の民衆に対して野蛮な掠奪や残酷な搾取をくりかえし、儒教の説く仁義道德の教説がまったく虚偽なるものであることを暴露したのである。ついで後漢の末年になって黄巾起義の運動を経た頃から、儒教唯一至上主義的立場がしだいに動揺をきたしてきた。

さらに軍閥が乱立して王朝は次々と交替し、国内は混乱を極めたので、民衆は安心して生活できるような状態ではなかった。多くの官僚地主はこれらの戦争によって死亡し、また社会において名士と呼ばれる知識人たちもたび重なる王朝の交替に巻き込まれて殺されるなどして、社会は常に動揺して落ち着くことはなく、民衆は非常な苦難を強いられたのである。このような時、門閥士族たちは新しい思想を求めたのであり、またこのような社会状態は宗教が流布するのに好い条件を備えていたのであった。仏教はこのような長い不安定な期間に、儒教との闘争や、相互に浸透し影響し合う過程をたどっていたのである。

やがて隋・唐時代になると、朝廷は特定の一種類の教えだけを尊崇するという政策

はとらず、儒教・仏教・道教の三教を併用するという方針に改めた。仏教はこの方策によって、中国における最盛期へと入ったのである。現存する数多くの資料は、この時期の仏教寺院の経済がすでに高度の発展を遂げており、訳経の規模や水準もみな前の時代のそれを超えていたことを証明しているのである。

訳経事業に関しては、それを代表する人物として著名な僧玄奘・義浄等があげられる。また仏教理論も漢文に翻訳された經典によって多くの体系の成立をみ、さらに中国の状況に適合している儀礼法規もまた基本的に完成され、これらによって中国仏教の宗派が形成されたのである。その中には、天台宗・律宗・浄土宗・三論宗・唯識宗・華嚴宗・密宗および三階教などの宗派がある。これらの仏教は士大夫階級に受け入れられ、哲学・文学・芸術等の各領域に影響を与えたほか、一般民衆の間にも広まり中国人の日常生活の中にまで浸透していったのである。

中国仏教教派のひとつをなす浄土教は、仏教が中国に伝来してから形成された新しいものではなく、すでに中国に伝来する以前に、インドにおいて形成された教派なのである。浄土教の歴史を考えてみると、もっとも早い時期のものとしては、インドの龍樹が著した『十住毘婆沙論』があり、念仏法門を提起している。これ以後、世親は『浄土論』を著して五念門を立て、浄土の教えを一派として進歩形成させた。この浄土教が中国に伝来したのは後漢の時である。後漢の高僧安世高が初めて『無量寿経』を翻訳し、支婁迦讖が『無量清浄平等覚経』を翻訳して浄土教の教義を中国に導入した。

しかし浄土教が一派として確立し、中国ならびに日本などの国において多大な影響を与え、数千万の信徒をかかえるようになったのは、東晋以後、南北朝・隋・唐時代の高僧および日本をはじめとする各国の高僧のたゆまぬ努力による醸成を経た結果である。中国では康僧鎧の翻訳した『無量寿経』が中国浄土教の形成に大きな影響を与えた。また廬山の慧遠・玄中寺の曇鸞・道綽・善導の諸大師は、ともに浄土教の形成と発展に偉大な貢献をなしたのである。

浄土教の教義の核心は、浄土、すなわち念仏することによって浄土に往生し、安養の福をうけることができるというものである。浄土とは大乘仏教が説く仏の居住するところのことであり、淨刹・淨界・淨国・仏国とも呼ばれている。またこの浄土とは、